

# リフレクティブな共在の仕方

企画責任者：高梨 克也（滋賀県立大学）

話題提供者：坂井田 瑠衣（公立はこだて未来大学）

大塚 裕子（社会福祉法人喜慈会子中保育園）

池田 佳子（関西大学）

指定討論者：石崎 雅人（東京大学）

「共在 co-presence」とは、「各主体が行っていることが相手に知覚され、また知覚されているという感覚も知覚されるほどに近接している状況」である（Goffman, 1963）。そこには、行為者たちがある場で共在しているものの、会話などの「焦点の定まった相互行為」は行っていないという状況も含まれる。自然な日常生活環境とはそのようなものだろう（高梨2016）。その意味で、人々が対面的状況に身を置き、互いの存在を直に確認しながら空間的に「共在」することは、教育や学習、看護やケア、余暇やレクリエーションなど、社会生活のあらゆる場面での実践のための最も原初的な基盤である。

近年では、ビデオ機器の普及も手伝い、社会におけるさまざまな共在の場に出向いてのフィールド調査やビデオデータの微視的分析も盛んになってきた。こうした方向性での主要な流れの一つであるワークプレイス研究（Luff et al., 2000, 水川他2017）は、従来の相互行為分析よりも少し広い視野に立って人々の日常的活動の実態を捉えていこうとするところにその特徴と強みがあると言える。そこでは、ある場面で見られる個々の行為や振る舞いとそれが生起する状況や文脈との間に「相互反映的 reflexive」な関係が成り立っていることが繰り返し確認されていく。

その一方で、ワークプレイス研究などの調査対象となる場面の多くでは、何らかの専門性を持った成員がそれぞれの職務（少なくとも社会的義務）の一環としてその場で他の成員と共在し、相互行為を行っているさまが観察される。これらの専門職は状況内で単に「即応的に reflexive」に行為しているだけでなく、行為遂行の中でいかに「省察的 reflective」になりうるかという点がそれぞれの専門職という成員性に即してより重要になるはずである。こうした「省察的实践家」（Schön, 1983）には、一方で、刻々と変わりゆく状況の中で適切な行為者として振る舞うという「当事者性」と、他方では、こうした進行形の実践を少しでも俯瞰的に捉えることによって自身の実践の問題点や改善点を見出し、対処していこうとするという「メタ性」という、容易には両立しがたいはずの条件が課せられていると考えられる。では、共在の場において何らかの専門性などをもった当事者たちはどういったスタンスでその場に臨み、また何を気にかけながら実践を行っているのか。こうした実践者による「行為の中での省察」（Schön, 1983）の実態は、従来の一般的な微視的相互行為分析だけでは、少なくともまだ十分には解明されてきていないのではないかと思われる。省察的实践家による「行為の中での省察」を解明しようとする研究者の側にも、従来とは異なる何らかの手法上の工夫が必要になるかもしれない。

そこで、本シンポジウムでは、共在の現場における実践者とこれを調査する分析者のそれぞれにおける「リフレクティブ reflective」なあり方を焦点とした議論を展開したい。話題提供では、歯科診療や視覚障害者の歩行訓練（坂井田）、保育園での保育士の他者との関わり方（大塚）、外国人材の国内企業での受け入れ（池田）といった、「省察的实践」が重要となるだろう場面における共在のあり方について、当事者たちによるリフレクション活動や研究者の側が行っている研究上の工夫なども交えながら紹介していただく予定である。さらに、これらの話題提供を通じて明らかになってきた特徴や課題について、指定討論者も交えた活発な議論を行うことを通じて、今後の新たな研究と実践の方向性を展望することを目指したい。

## 参考文献

- Goffman, Erving (1963). *Behavior in public places: Notes on the social organization of gatherings*. New York: Free Press. (丸木恵祐・本名信行訳 (1980). 集まりの構造—新しい日常行動論を求めて— 誠信書房)
- Luff, Paul, Hindmarsh, Jon., & Heath, Christian (eds.) (2000). *Workplace studies: Recovering work practice and informing system design*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 水川喜文・秋谷直矩・五十嵐素子（編）(2017). ワークプレイス・スタディーズ：はたらくことのエスノメソドロジー ハーベスト社
- Schön, Donald A. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. New York: Basic Books. (柳沢昌一・三輪健二訳 (2007). 省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考 鳳書房)
- 高梨克也(2016). 基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法 ナカニシヤ出版

# 「リフレクティブな共在の構え」は観察可能か

坂井田 瑠衣 (公立はこだて未来大学)

## 1. はじめに

人は、自らが置かれた状況や場面に応じて、さまざまな態度や構えをもちながら他者と共在している。共在 (copresence) とは「各自が行なっていることが相手に知覚されるほどに、また知覚されているという感覚が知覚されるほどに、近接して」いる状態のことであるが (Goffman, 1963/1980), 実際の社会的場面においてみられる共在の姿は多様である。見知らぬ者同士が居合わせているだけの場合もあれば、複数人による会話や共同作業がおこなわれている場合もある。

とくに医療やケア, 教育や学習などの実務的な活動がおこなわれる場面において, 人々は, それぞれの活動の目的に志向しながら, その場の会話や共同作業に参加していることが多いだろう。そうした相互行為に参加する人々は, その場に共有された活動の目的を達成することに貢献すべく, 自らの行為に対して, より自覚的・反省的な, すなわちリフレクティブな態度や構えで他者と共在していると考えられる。

人々がいかなる「共在の構え」(坂井田, 近刊) をもちながら相互行為に参加しているか (していたか) にアプローチするためには, 当事者による事後的な内省報告や当事者へのインタビューなどを手がかりにすることもできる。しかし, 必ずしも当事者自身による事後的な語りがなくとも, 共在状態における具体的なふるまいから, 人々がリフレクティブに共在しようとする態度, すなわち「リフレクティブな共在の構え」を観察することは可能であると考えられる。

## 2. 事例分析

人々がリフレクティブな態度や構えをもって共在していると考えられる場面として, 歯科医院における診療場面, 視覚障害者の歩行訓練場面を取り上げる。歯科医院における診療場面では, 歯科衛生士が, 共在する歯科医師が現在どのような業務に従事しているかを注意深く観察しながら, 自らの業務を遂行するタイミングをそのつど調整している様子が観察される。視覚障害者の歩行訓練場面では, 全盲の視覚障害者が, 共在する晴眼の歩行訓練士が言葉で説明する対象物について, 自らの触覚や聴覚を使って確かめ, その特徴を把握することで, 当該対象物に対する知識を蓄積的に獲得していく様子が観察される。こうしたふるまいは, 人々が「リフレクティブな共在の構え」をもちながらそれぞれの場面における活動に参加していることのあらわれであると考えられる。

## 3. 「共在の構え」の観察可能性

人々の内面的な状態としての「共在の構え」は, 当事者の事後的な語りに頼らずとも, ある程度は共在状態における具体的なふるまいから観察できるものである。むしろ, その場で観察可能にされ, 他者と共有されているふるまいを証拠として人々の共在の構えを捉えようとするのは, 相互行為の参加者の視点に立った分析として妥当である。

他方, そうした共在の構えは, それぞれの場面に特有の成員性や個人の身体特性などと不可分であるとも考えられる。「リフレクティブな共在の構え」を観察しようとする研究者には, データの中で具体的にみられるふるまいと, その背景にある成員性や身体特性といった諸条件がもたらす制約や可能性とを「リフレクティブに」関連づけることで, 人々のふるまいから「漏れ出る内面」に迫ろうとする「構え」をもつことが求められるだろう (諏訪・伝・坂井田・高梨, 2020)。

### 参考文献

- Goffman, Erving (1963). *Behavior in public places: Notes on the social organization of gatherings*. New York: Free Press. (丸木恵祐・本名信行訳 (1980). 集まりの構造—新しい日常行動論を求めて— 誠信書房)
- 坂井田瑠衣 (近刊). 「共鳴的共在」としての歯科診療の場 木村大治・花村俊吉 (編) 出会いと別れ—ヒトと動物の「あいさつ」をめぐる相互行為論— ナカニシヤ出版
- 諏訪正樹 (編著)・伝康晴・坂井田瑠衣・高梨克也 (著) (2020). 「間合い」とは何か—二人称的身体論— 春秋社

# リフレクションにおける当事者性とメタ性のデザインと実践 —子中保育園における保育リフレクションの事例—

大塚 裕子 (社会福祉法人喜慈会子中保育園)

## 1. 保育所におけるリフレクティブな共在の仕方

近年、「子ども一人一人の主体性を尊重する」という保育の質の向上のためには子どもそれぞれの姿に関する観察、記録および保育者による対話的なリフレクションが不可欠であるとされている (Carr, 2001, Rinaldi, 2006, 厚生労働省, 2019). 子どもと保育者の共在において、保育者は参加者でありながら、子どもと自分を俯瞰的に捉える観察者としての眼も必要である。参加者である場合、自分の関わりによる子どもの反応から、その場で関わりを変更する即応的かつ即時的な省察もある。違和感や直観的な面白さに気づくが、それが何か明確にならなかつたり、すぐに対応できず深く考える必要を感じたりする場合、写真やメモにより場面や状況を記録し、想起したうえで場面の意味、対応、改善策について行う省察もある (刑部, 2009, 岩田, 2018). 直観的に気づけるのは、子どもの発達過程に関する知識や保育の経験知、目の前の子どもの状況・状態やその背景などを勘案したうえでの予見的な省察に基づく。いずれも「行為の中の省察」であり (ショーン, 2007), これらの省察をより深めるのが他者を介してのリフレクションである (杉村, 2009, 金, 2009, 野口, 2014).

## 2. リフレクティブな共在であるために

当園でも、子どもと保育者、子ども同士、保育者同士、保護者と保育者をはじめとする多様な共在の関わり合いに関する保育者らの個別のふりかえりや、職員会議や園内研修としての保育リフレクションを行っている (大塚, 2020). 筆者が2017年から運営に携わって以降、保育者らが記録とリフレクションをより重視するようになったきっかけが3点ある。一つは、2017年に保育者全員で新たに保育理念を作成し、それを実現するための具体的な行動指針を練ったこと (伊藤, 2019), 二つめは保育者らが行っている実践を報告や論文にまとめ、それらが第三者に評価されたこと (伊藤, 2019, 桑田, 2019, 大野, 2020), 三つめは、2018年に当園をフィールドとして研究していた学生が、自身が参加あるいは関与する保育場面をビデオで撮影し、繰り返しそれらの場面に対する保育者からの聞き取りや全員でビデオを見ながらのリフレクションを行ったことである (桑山, 2019). これ以来、ボイスレコーダーやビデオで子どもや保育者のリアルな言動を記録として残すこと、子どもの一挙一動を記録するための写真連写による可視化、自身も被写体となることを保育者が自主的に行うようになった (大塚, 2020). 保育者が複数の子どもたちの安全を確保しつつ、学びの支援を行いながら、これらのツールを使って記録を行おうとすることは、これらの記録に対する重要性への相当な意識が必要である。この3点は、リフレクションにおける当事者性とメタ性を両立する鍵となっていると考える。

## 参考文献

- Carr, Margaret (2001). *Assessment in early childhood settings: Learning stories*. London: Paul Chapman Publishing.
- 刑部育子・戸田真志・植村朋弘・佐伯胖(2009). 観察中の「瞬間リフレクション」記録・分析のためのツール開発 日本認知科学会第26回大会論文集, 3-5.
- 伊藤千晶・大塚裕子(2019). 自己選択を重視したお別れ遠足のデザインと実践 第13回日本保育協会保育実践研究・報告集, 7-13.
- 岩田恵子・大豆生田啓友 (2018). 保育の可視化へのプロセス 玉川大学学術研究所紀要, 24, 1-13.
- 金玟志 (2009). 新人保育者による省察の意味とその変容を支える支援のあり方—保育実践後の「保育者間の話し合い(対話)」の中から— 保育学研究, 47 (1), 66-78.
- 厚生労働省 (2019). 子どもを中心に保育の実践を考える～保育所保育指針に基づく保育の質向上に向けた実践事例集～.
- 桑田幸生・大塚裕子 (2019). 図解コミュニケーションの試行的実践 第13回日本保育協会保育実践研究・報告集, 17-23.
- 桑山菊夏 (2019). 保育園における多声的なリフレクション実践: 体験の物語的理解の醸成 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士論文
- 野口隆子 (2014). 保育者の専門的発達: 幼稚園保育文化と語り 白梅学園大学大学院子ども学研究科博士課程学位論文
- 大野亜海・大塚裕子 (2020). 「いいとこさがし」で育まれる伝え合いと協同性 第14回日本保育協会保育実践研究・報告集, 7-12.
- 大塚裕子・桑田幸生 (2020). ドキュメンテーションとリフレクションにもとづく保育実践のデザイン 認知科学, 27(2), 163-174.
- Rinaldi, Carlina (2006). *In dialogue with Reggio Emilia*. London: Routledge.
- 杉村伸一郎・朴信永・若林紀乃 (2009). 保育における省察の構造 幼年教育研究年報, 31, 5-14.
- Schön, Donald A. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. New York: Basic Books. (柳沢昌一・三輪健二 訳 (2007). 省察的実践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考 鳳書房)

# 日本国内企業が対峙するリフレクティブな共在 —外国人材の受入れという「内なる国際化」—

池田 佳子 (関西大学)

## 1. はじめに

2019年以降の日本における改正入管法施行も後押しし、近年になり、日本企業側に対して、グローバル化する社会やそれに準じた働き方に対応し、企業内の変革の必要性を主張する見解が台頭し始めた(日本貿易会 2017)。しかし日本では、約6~7割の国内の外国人留学生が日本での就職を希望するものの、最終的に就職まで到達する者は約3割と、有能な外国人材の潜在層を十分国内に留めることができていない(日本学生支援機構 2013)。日本企業で働く外国人は、日本に住むことに魅力を感じる(83%)が、日本企業で働くことには特に強い魅力を感じていない(51%)との調査結果もある(日本国際化推進協会 2015)。2020年から続くコロナ禍で海外からの日本への入国がままならない中、一時的な着目度は薄れた印象があるものの、労働人口の減少もあり今後も外国人材を多く必要とする国内企業の現状は続く。国内企業は、やはり、異文化背景を持つ者をはじめとした、多様性と包括性(ダイバーシティとインクルージョン)を備えた企業文化の改善が必須となっている。

日本で働く以上、外国人材層(とその候補層である外国人留学生)の日本語能力や日本文化の受容性を高めることは現実的に不可欠であるが、そのためにも、彼らがその独特の感性や能力を社内で最大限に発揮できるような国内企業の環境作りが一層重要になる(経産省 アジア産業基盤強化等事業「内なる国際化」研究会報告書 2016)。この改革の一端を担うのが、企業人の日本人ビジネスパーソンの「異文化間能力」の向上である(Byram 1997)。日々の多文化背景を持つ者が共働する場面において、状況を見極め、適切な気づきの下、望ましい効果・結果をもたらす言語行動(アクション)の選択ができるといった異文化間能力を養成するには、本シンポジウムで焦点化する「リフレクション」を伴う変容学習(transformative learning)が起こらなければならない。このように、国内企業へ「内なる国際化」を働きかけ外国人材を受入れ、共生し、経済成長する一翼を担う施策が動き出している。本研究ではその実態と効果を考察する。

## 2. 本研究で焦点化する対象について

本研究では、筆者が関係するいくつかの行政主導の取組を通してできた企業向け研修素材やプログラムを分析の対象とする。具体的には、2017-2021年度で文部科学省委託事業として進めている「外国人留学生の就職促進プログラム」SUCCESS-Osaka事業で実施している企業支援フォーカス・グループと、2020年度に経済産業省、厚生労働省、文部科学省の3省共同で発足した「外国人留学生の就職や採用後の活躍に向けたプロジェクトチーム」での議論を踏まえ作成された「職場でのミスコミュニケーションを考える」教材および「学びの手引き」を本発表では取り扱う。当事者である国内企業人に、留学生との接触体験という実践や、仮想場면을シミュレーション体験することで「行為の中のリフレクション」(シヨーン 1983)を促す。また、自身の判断・行動を振り返る作業を通して「行為についてのリフレクション」を行う活動等がこれらの教材に含まれている。このような経験学習(Kolb 1984)プロセスによって個々の信念や思考習慣の変容を起こし、ひいてはこうした変容が研修後の実社会での今後の行動に転移されるよう導こうとするものである。考察では、その転移が実際に期待できるのか、つまり当事者らがメタレベルでの意識を維持しつつ外国人材の受入れができるようになっていくのか、という点についても検証する。

### 参考文献

- Byram, Michael (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Kolb, David A. (1984). *Experiential learning: Experience as the source of learning and development (Vol. 1)*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Schön, Donald A. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. New York: Basic Books.